

**山鳥坂ダム・鹿野川ダム環境検討委員会**  
**第4回動植物の保全に関する専門部会**  
**議事概要**

日時 平成21年3月16日 9:55～11:40

会場 山鳥坂ダム工事事務所 会議室

出席者 愛媛大学農学部 酒井教授

愛媛大学農学部 三宅講師

愛媛大学農学部 久松氏

## 1. 山鳥坂ダムについて

### 1.1 各種の調査結果及び今後の調査について

#### ①オモゴミズギワカメムシ

- ・流水性なので、止水域の水際には生息していない。
- ・飛翔して移動するが、ダム湖が出来れば上下流に分断されるだろう。但し、上流側でも下流側でも存続はできると考える。
- ・オモゴミズギワカメムシについては、多く生息しているのは確かであろう。県内の河川の上流域だけでなく中流域でも多くの産地が確認されている。特段の保全措置は必要ないだろう。

#### ②キイロサナエ

- ・キイロサナエについては平成11年度以降確認されておらず、河辺川の環境もキイロサナエには適していないと考える。

#### ③アオサナエ

- ・成虫が全く確認されていないので情報不足である。アオサナエは成虫が特徴的なので捕獲しなくても同定できる。成虫についても調査すべきである。
- ・現時点の生息状況の結果をみれば、個体数が少ないが、確実に生息しているアオサナエについて詳細に調査・保全措置の検討をする必要があるだろう。アオサナエを主体に調査しつつミヤマサナエ及びキイロサナエの生息状況を把握するのが良いのではないか。

#### ④ミヤマサナエ

- ・保全措置対象種にすることについては問題ない。しかし、平成20年だけでは情報が不足しているのではないか。
- ・サナエトンボ類の幼虫は流下することが知られている。特にミヤマサナエはかなり下流まで流されてから羽化する。影響予測や、このような生活史を把握することが必要だろう。
- ・ミヤマサナエが琵琶湖のような湖でも生息できるとされているが、波により溶存酸素が高い環境だからだろう。ダム湖ではどうか何とも言えない。

#### ⑤トンボ類全般

- ・生息環境を整備するのであれば、多産地の環境を調べる必要があるのではないか。
- ・ダム湖まで流下したサナエトンボ類の幼虫が生息できるかどうかは重要である。水質等

の予測結果について把握する必要がある。

- ・保全の観点から成虫の産卵環境があるかどうかは重要である。
- ・今年には愛媛県内の河川・ダム湖で底生動物の河川水辺の国勢調査が実施されている。他ダムでも、キイロサナエやアオサナエが出ているようである。これらのデータを使って、流域における生息状況を把握する必要があるだろう。
- ・全国の河川水辺の国勢調査の調査結果を使って、同規模のダム上流河川にこれらの保全措置対象種となっている種が生息しているかどうかを把握するのは重要だろう。
- ・平成21年度以降の調査としては、対象事業実施区域及びその周辺の区域にこだわるのではなくて、上流域を含めた調査をすべきである。

## 1.2 保全措置の基本方針について

- ・動物に関する保全措置の基本的な考え方及び目標について、「具体的には、保全措置の実施等により保全措置対象種の対象事業実施区域及びその周辺の区域を含む地域の生息環境が維持され、保全措置対象種の生息が確認されることとする。」というのは大筋では問題ないとする。
- ・地域の個体群が存続されているからといって、今まで何地点もあった生息地が、1地点になっても、存続しているから良いというのは問題がある。そのような観点も考慮すべきである。
- ・保全目標としては、メタ個体群の観点での保全を考える必要があるかもしれない。
- ・昆虫では移植は有効な保全措置ではないと考える。生息環境を創造すれば、飛来する。特にトンボ類はそうだろう。
- ・移植するとしても、生息している全個体を移植するのは、捕獲に問題があり難しいだろう。

## 2. 鹿野川ダムについて

- ・確認されたメクラチビゴミムシ類は確実な同定はされていないが、新種である可能性が高い。既知の種であったとしても、重要な種であることは間違いないだろう。
- ・昔は洞窟で調査していたが、今回行われた地中トラップでかなり広く分布していることがわかってきた。
- ・3月19日にメクラチビゴミムシ類の権威である上野博士が調査するので、詳しいことがわかるだろう。
- ・これらのメクラチビゴミムシ類がどの範囲に分布しているか把握するのが重要であり、今後も調査する必要がある。
- ・調査地域に広く分布していることがわかれば、改造事業による影響は限定的だろう。

以上

終了後、メクラチビゴミムシ類の確認地点（2地点）を視察頂いた。